

外国から伝播された子どもの歌の教材研究(1)

—英国伝承童謡の和訳歌詞をめぐって—

Research on Children's Songs Introduced from Abroad as Teaching Materials (1)

—Concerning the Lyrics of Traditional English Nursery Rhymes
in Japanese Translation—

丸 林 実千代
MARUBAYASHI Michiyo

[**Abstract**] In elementary school music classes, songs designated as both principal teaching materials and supplementary teaching materials are prescribed and used in accordance with the basic teaching goals of academic lesson plans. However, materials not prescribed in those plans are sometimes used as the teacher deems fit, based on his or her personal experience. For example, there are songs such as “Mary Had a Little Lamb”, “London Bridge is broken down”, and “Twinkle, Twinkle Little Star”. These songs are traditional English children's ditties, and in England these types of traditional songs are collectively known as “nursery rhymes”. As these nursery rhymes spread throughout the world, they came to be referred under the name of “Mother Goose”, and this name is now well-established around the world.

When these children's songs are used in music classes, are they chosen as teaching materials with the awareness that they are in fact Japanese translations of traditional English children's songs? This paper conducted an analysis of Japanese translations of the songs of Mother Goose, and attempted to investigate the legitimacy of children's songs from abroad as teaching materials in Japan. In the analysis, the Japanese lyrics of Shuntaro Tanikawa, whose score has been published, were taken as a basis, the lyrics of Hakushu Kitahara, Shuji Terayama, and Sumiko Ishikawa were applied to the score, and a comparative study was carried out (for six songs). Results revealed that the Japanese lyrics of the three translators other than Tanikawa himself were proven as such they cannot be sung as songs. It is because they had the following issues: there were excess words which could not be sung; there was no alternative but to squeeze in these lyrics as extra syllables in portions of the song which had no notes, while in portions where there was a melody; the lyrics were cut short; and there are no notes or melody to match them completely although there are Japanese translations. However, it is shortsighted to conclude that the Japanese versions of these three translators are unsuitable for use simply for the reason that they cannot be performed as songs. These three translators went to great lengths to render traditional English children's songs into Japanese as rhyming poems, and each is an excellent Japanese translation as such.

It is critical to examine the diversity of these sorts of Japanese translated lyrics from the point of view of the educational research which is principal object of this paper. As such, teachers using them as educational materials must understand them as foreign children's songs dating back to their melodic origins, and explore the significance of turning them into educational ma-

terials. Via research on the teaching materials of that sort of teacher, children's songs imported from abroad can be utilized in a variety of teaching methods and can be put to practical use. Moreover, the further expansion of creative music instruction is possible.

1. はじめに

小学校の音楽授業では、主教材や副教材といった楽曲が学習指導案の指導目標のもとに方向づけられ用いられている。しかし、学習指導案には記されない教材が教師の経験にもとづき臨機応変に使用されることがある。例えば、「メリーさんの羊 (Mary had a little lamb)」「ロンドン橋 (London Bridge is broken down)」「きらきら星 (Twinkle, twinkle, little star)」などである。これらは、当然のことながら日本独自の楽曲ではなく、外国から伝播されたものである。このように音楽授業で用いられる子どもの歌には、外国から伝播された楽曲も多く含まれている。

では、教師は音楽授業でこれらの子どもの歌を用いる時、それが外国から伝播された楽曲の日本語訳であることを意識して教材化しているのであろうか。おそらく教師はその楽曲を既知のものとして、十分な教材研究もせず、それ自体に疑問を抱くこともなく授業で使用しているのではなかろうか。そこで、このような外国から伝播された子どもの歌の和訳歌詞を今一度詳しく研究することで、さらに有効な教材として活用することができ、ひいては音楽授業の充実につながると考えるのである。

上記に例示した3曲の原曲は英国伝承童謡であり、英国ではこのような伝承童謡をナーサリー・ライム (Nursery Rhymes) と総称している¹⁾。またこれらの英国伝承童謡は世界に普及していく過程で、マザーグース (Mother Goose) と称されるようになり、この名称は現在世界中で定着している。そこで本論文では、外国から伝播された子どもの歌の中から、英国伝承童謡 (マザーグース) を取り上げ、その和訳歌詞に焦点をあて論じていきたいと思う。

2. 英国伝承童謡 (マザーグース) 研究の概観

(1) 海外におけるマザーグース研究

英国伝承童謡 (マザーグース) の研究は、1842年にシェイクスピア研究者であるJ.O.ハリウェル (James Orchard Halliwell-Phillips, 1820~89)によって出版された『イングランドの伝承童謡』(*The Nursery Rhymes of England*)が最古のものとされている。ハリウェルは600篇以上もの英国伝承童謡を収集、分類し、さらには注釈まで付けて出版した。そして彼は、1848年に『イングランドの民謡とお伽話』(*Popular Rhymes and Nursery tales of England*)も出版し、これら2冊はそれ以後のマザーグース研究で、各童謡の年代や起源を知るために常に参照され続けていた。

この2冊の出版以降、100年ほどはこの研究を凌駕するものは登場しなかったが、1951年に民俗学者であるオーピー夫妻 (Iona and Peter Opie)によって『オックスフォード版伝承童謡辞典』(*The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, Oxford University Press)が出版された。この辞典は550篇ほどのマザーグースを所収しており、初出文献など可能な限りの具体的情報を示している。そして、辞典という性格を全面に押し出し、内容で分類するのではなく、アルファベット順に配列し、引き易くしているのが最大の特徴である。その後も改訂版が繰り返され、現在でもマザーグース研究のよりどころとされている。

その後、ハリウェルとオーピー夫妻の研究を参照しながら、マザーグース研究が進められ、多くの出版物が刊行されている。それらの研究に共通する特徴は、新たな童謡を発見すること、1つの童謡の初出年代を探ること、諸地域で収取される童謡の差異を指摘すること、様々な観点から分類を試みること、そしてそれらを綿密な表にまとめ上げることなど、いわゆるアーカイブ的研究が主流となっている点である。

(2) 日本におけるマザーグース研究

日本におけるマザーグース研究は、マザーグースの和訳に対して文学的、英語学的な観点からアプローチしているものが多い。また、日本での普及過程について史的に解明しようという試みも少なくない。特に、日本において本格的に翻訳に取り組んだ北原白秋の和訳に対する研究は、史的、文学的なアプローチがなされており、北原白秋の『まざあ・ぐうす』(1921)は研究対象とされることが多い。

では、本論文の論点である子どもの歌(=歌曲付きのマザーグース)や、学校教育での教材としての研究はどうであろうか。まず、前者であるが、根本的にマザーグースは口授による伝承の詩(ほとんどが押韻詩)であり、大部分が音楽的に歌うため(=歌曲)に創られてはおらず、楽譜とともに保存されてきたものではない。これについて平野氏は「マザー・グースの唄というものは、かならずしも歌うもの、遊戯に使うものではない(中略)マザー・グースの唄は、遊戯としても歌曲としても強い生命力をいまももっているが、現実には『読んできかせる』という面が優位している²⁾」と述べている。このような理由から、子どもの歌としてのマザーグース研究は極めて少ない。しかし、鷺津氏が複数の著書の中で触れているように、日本でのマザーグースは歌うことによって浸透してきたという点は事実である³⁾。実際、上述の「メリーさんの羊」「ロンドン橋」「きらきら星」などは、日本のいたるところで歌われている。また、谷川俊太郎が訳した『マザー・グースのうた別巻 マザー・グースうたのほん』は、71篇のマザーグースを楽譜付きで掲載し、1977年に出版されている(草思社)。ここでは、楽譜と歌詞が一致するように谷川が翻訳しており、極めて音楽を意識した和訳となっている。

次に後者の学校教育での教材としての研究はであるが、これに関しては石濱氏らによって小学校の外国語活動としての授業研究の報告がある⁴⁾。しかし、音楽授業に関する研究の明確な資料は見当たらないのが現実である。

そこで、日本の音楽授業で教師の経験にもとづき臨機応変に用いられている、外国から伝播された子どもの歌をさらに有意義な教材とするために、歌いながら伝承されてきたマザーグースの和訳歌詞について検討することは有意義と考える。

3. 本論文の目的と研究方法

(1) 本論文の目的

本論文は、外国から伝播されて子どもの歌を教材と活用するための基礎研究として、歌曲として歌われる英国伝承童謡(マザーグース)の和訳歌詞を楽譜とともに分析し、その特徴を明らかにすることを目的とする。

(2) 研究の方法

マザーグースの和訳を楽譜とともに掲載している資料は少ない。そこで、現在入手可能な資料の中から最多の楽譜を掲載している谷川俊太郎訳の『マザー・グースうたのほん』（草思社、1977）を基本とする。次に、マザーグースの代表的な翻訳家の作品から、ここに掲載されている71篇と同じ作品を抽出し、分析対象とする。そして、それらを1曲ずつ楽譜とつきあわせ、和訳歌詞の特徴を指摘する。

(3) 分析対象

ここで取り上げる翻訳家は、北原白秋、寺山修司、石川澄子である。

北原白秋は、上述のとおり日本で初めて本格的な翻訳を出版しており、彼のマザーグース訳については多くの研究がなされているなど、本論文でも対象として除外することはできない。分析対象は、北原白秋『まごあぐうす』角川書店、1976。

次に、寺山修司は演劇界で著名な人物で、劇作家であり優れた詩人であるが、彼はマザーグースを翻訳し絵本として出版している。鷺津氏が彼の作品を「この絵本でも、彼一流の想像力を駆使した個性的な訳が随所に見られる⁵⁾」と高評価しており、本論文ではその翻訳感覚を歌曲という点から検討してみたい。分析対象は、寺山修司訳、アーサー・ラッカム絵『マザー・グース』新書館、1991。

そして石川澄子氏は、全730頁にもおよぶ『完訳 マザーグース』を出版しており、この原著は米国でW.S. ベアリングールド (William S. Baring-Gould) らが編纂し極めて綿密詳細な注釈を付した大著である。このベアリングールドの原著について鷺津は「アメリカにおけるマザーグースの選集・研究書として最も優れたもので、マザーグース研究書としては『オックスフォード版伝承童謡辞典』と双璧をなすものである。⁶⁾」と絶賛している。この大著を翻訳した石川の業績は日本のマザーグース研究に大きな影響を与えており、そこで本論文でもその和訳を取り上げたい。分析対象は、W.S. ベアリングールド & C. ベアリングールド編纂、石川澄子訳『完訳 マザー・グース』鳥影社、2003。

これら3著作と楽譜付きの谷川訳の掲載作品を検討した結果、以下の6曲がすべての著作に含まれていることが判明した。そこで、本論文ではこれら6曲を分析対象とする。(①から⑥の作品名は谷川の訳に準じた。)

- ① トムトムふえふきのこ
- ② コールのおうさま
- ③ 6ペンスの うたをうたおう
- ④ ポリー やかんをのつけてよ
- ⑤ ロンドンばしが おっこちる
- ⑥ てんとうむし てんとうむし

4. 英国伝承童謡（マザーグース）の和訳歌詞の分析

谷川の著作に掲載されている楽譜を基本とし、その楽譜に3名の翻訳をあてはめるという分析

作業を行った。ここでは、紙幅の都合上、①の楽譜だけを提示し、②以下の楽譜は省略する。歌詞の改行部分は / (スラッシュ) で示した。谷川の楽譜に付された訳で、歌の 1 番 2 番などと記されているものは、他 3 名の訳において記されていない場合でも、分析の都合上 1. 2. と記した。また、各曲の原典となっている英詩も紙幅の都合上省略する。

① トムトムふえふきのこ

1. トム トム ふえふきのこ / おた ため につ げ た / おた は た べ ら れ / トム は お た れ

2. トム トム ふえふきのこ / おた ため につ げ た / な い て と お り を / か け て い っ た

ふ な た い は て た と べ ら り れ を ト か め は て ぶ っ た た れ

【楽譜】 谷川俊太郎訳「トムトムふえふきのこ」の楽譜 p.71

【谷川俊太郎】(p.71) 1. トム トム ふえふきのこ / おた ため につ げ た / おた は た べ ら れ / トム は お た れ

2. トム トム ふえふきのこ / おた ため につ げ た / な い て と お り を / か け て い っ た

【北原白秋】(p.113) トム、トム、トムぼうず、 / 笛ふきのむすこ / おたをぬすんでにげたはよいが / おたはたべられ / トム あ ぶ っ た た か れ

2. な い て おんおん まちをかけた

【寺山修司】(p.93) 1. トム / トム / 笛吹きむすこ、 / おたをぬすんでにげたはよいが、 / おたはたべられ、トムあぶったたかれ、 / な い て おんおん街をかけた。

【石川澄子】(p.197) 笛吹の子がブタ盗って逃げた / こら待て小僧 / 逃がさぬぞ / ブタを喰い喰いととと駈けた / ブタ喰ったトムはブタ屋にブタれ / アンアン泣いて駈けて行く

<分析結果> 谷川は「トムトムふえふきのこ おた ため につ げ た」を 2 回繰り返しており、印象が強く残るようにしている。また伝えたいことに焦点化し訳しているため、歌いやすくストーリーも分かりやすい。北原は楽譜 1 番の 1 段目と、2 番 6 小節目で文字が多くて歌えない。1 番の 4 と 8 小節は字余りになり、2 番の 1 段目の歌詞が無く、7 小節目 2 拍以降も歌詞が無くなる。寺山は 3 人の中では一番谷川の訳に近く、旋律に対して違和感がない。しかし 3 人に共通するように 2 番の 1 段目の歌詞が無く、最終小節では字余りにもなり、歌曲として成り立たない。石川は笛吹のむすこを強調しており、他の 3 人のようにトムという人物名を全面には出していない。そしてセリフが入っているため（この部分には該当する楽譜が無い）、物語を読んでいるような

印象を受ける。そして、1番の5小節目以降は文字が多すぎて歌うことができず、北原・寺山と同様に2番の1段目の歌詞が無く、歌曲として成り立たない。

②コールのおうさま

【谷川俊太郎】(pp.64-65) コールのおうさま / ゆかいなおうさま /ほんとにゆかいな おひと
がら / パイプもってこさせ / おさけもってこさせ / おまけにヴァイオリンひき3に
んよんだ / ヴァイオリンひきの ヴァイオリンは / どれもこれも とびきりじょうと
う / テーラ リーラ テーラ リーと かなでれば / ああ これこそてんかいっ
ぴん / くらべるものなし / コールのおうさまと / そのがくだん

【北原白秋】(p.41) お年寄りのコオル王は愉快なお爺、/ 愉快なお爺、/ すぐにパイプめして、
お酒杯めしてね、/ そして胡弓ひきを三人ほどおめしで。/ どれの胡弓ひきもよい胡
弓もちでよ、/ 中で一番な王さまの胡弓よ、/ ツウイ・ツウイヅル・デイツウイヅル・
デイ……/ それぞれ胡弓ひきがひきだしたよ、おおきな。/ だれかにくらびようか、
めったにかたなかる、/ コオル王さまとその胡弓ひきよね

【寺山修司】(p.154) コールじいさん 王さまだ / とても愉快なじいさんだ / おんぼろパイプ
と / やすい酒 / そして楽団三匹よんだ / あつまってきた 楽団は / バイオリンな
ら負けません / スイッチョ スイッチョ / コロコロロ / 唄っていたら もう秋だ /
コールじいさん 王さまだ / とても愉快なじいさんだ / おんぼろパイプと / やす
い酒 / そして歌い手三匹よんだ / あつまってきた 歌い手は / ワンワン バオバオ
/ ミャーオ ミャーオ / 唄っていたら 月が出た

【石川澄子】(p.268) コール王は / 春風のような好々爺 / いつもにこにこ / 片手にパイプ
片手に酒杯 / 三人のヴァイオリニストを / はなさない / いずれ劣らぬ名器を持つ /
三楽人の奏でる妙なる音色は / トイードルディ トイードルディ / コール王と三
人のヴァイオリニスト / 世に較べるものもない / よい聴き手とよい弾き手

<分析結果> 谷川は歌詞の1・2行目に「～おうさま」、4・5行目の「～こさせ」という表現を
そろえることで、歌にリズム感を与えている。また、ヴァイオリンの擬音が旋律とよく合致して
おり歌いやすい。北原はヴァイオリンではなく胡弓と訳し、場面が西洋ではなくアジアの雰囲気
を出している。歌詞は基本的に文字が多く、旋律に合わせ歌うことは困難である。そして4・8
小節目には字余りがある。寺山はシンプルな訳にしているため、歌詞が無く歌えない部分が多く、
4小節目は字余りとなる。他の3人とは異なりヴァイオリンの擬音を「スイッチョ スイッチョ
コロコロロ」と訳し、後の歌詞の「もう秋だ」につなげ季節感を出している。石川は歌詞が理
解しやすく、3人の中で一番曲に合わせやすい。冒頭の「春風のような好々爺 いつもにこにこ」
では、コール王の人物の良さを表現する訳が試みられている。しかし、2・3小節目と12・13小
節目は、文字が多くて歌えない。

③ 6 ペンスの うたをうたおう

【谷川俊太郎】(pp.74-75) 1. 6 ペンスの うたをうたおう / ポケットは むぎでいっぱい /

にゅじゅうよんわのくろつぐみ / パイにやかれた ことりたち

2. パイをあけたら うたいだす / ことりたちは おうさまに / さしあげる しゃれたおりょうり / さしあげる しゃれたおりょうり

3. おうさまおくらで かねかんじょう / おきさきさまは おへやで / はちみつぱんを もぐもぐ / はちみつぱんを もぐもぐ

4. じょちゅうは にわでほしもの / そこへつぐみが やってきて / はなをばちんと ついばんだ / はなをばちんと ついばんだ

【北原白秋】(pp.31-32) 1. うたえうたえ、六ペンスの歌を。 / 衣簍にゃごほうびの麦がある。 / 二十四匹の黒つぐみ、 / 焙じこまれて、パイの中。

2. パイがはがれたそのときに、 / すぐに小鳥がうたいだす。 / もともと王さまにそなえます / きれいなお皿じゃ、そりゃないか。

3. 『王さまは会計院で、 / お金の御勘定。 / おきさきやお居間で、 / パンと蜜をめしあがり。

4. 女中さんはお庭で、 / 衣装をせっせとほしている。

5. そこへ小鳥が一只とんでまいって、 / つんとはじきました、女中さんのお鼻』

【寺山修司】(p.19) 1. ポケットにライ麦いれて / 知らんふりして / 六ペンスの唄をうたえば / 二十四羽のくろつぐみが / パイにやかれる

2. パイをあけたら / まっくろこげのくろつぐみが / 声をそろえてうたいだす / 王さま！ / ごちそういかが？

3. 王さまはおくらのなかで / 一日いっぱい お金かぞえる / おきさきさまはベッドで / はちみつパンを もぐもぐたべてる

4. 女中は庭で / 洗濯物ほしてる / そこへつぐみがとんできて / パチン！ と / 鼻をついばんだ

【石川澄子】(pp.35-36) 1. 歌えや歌え六ペンスの歌 / ぴちりつまった粉袋 / いたずら小僧は / ひと束にして / ケーキのなかに焼きこむぞ

2. パイを開けたらピイチクパーチク / 黒いつぐみが飛び出した / その特製のうまそうなやつ / 王さまのだろ そうじゃないか

3. 王さまは勘定部屋で / 錢勘定 あがりある身は羨ましいね / お后さまア居間にくつろぎ / べっとり蜜つけパンをムシャムシャ

4. 女中は庭で / 洗濯ものを干していた / そこへつぐみがやってきて / 鼻をばきんともいでいった

<分析結果> 谷川の訳は、旋律に合わせて歌詞が無理なく並んでおり歌いやすい。また同じ単語を並べることで、歌詞にもリズム感を与えている。北原は、3小節目に文字が多くて歌えない部分を除いては比較的歌いやすいと思われる。寺山は曲のテーマをなす「六ペンスの唄をうたえ」の訳が、旋律に対して文字が多く歌えない。さらに4～8小節目は、文章のようで歌いにく

いとともに、最後の8小節目の旋律に該当する歌詞が無くなっている。石川は全体的な流れが音楽的になっているようだが、2小節目の文字が多く歌えない。また6小節目には字余りがみられる。

④ポリー やかんをのつけてよ

【谷川俊太郎】(p.15) ポリー やかんをのつけてよ / ポリー やかんをのつけてよ / みんな
でおちゃを のみましよう

スーキー やかんをおろしてよ / スーキー やかんをおろしてよ / みんなどっかへ
いっちゃった

【北原白秋】(p.71) ポウリイ、やかんをかけときな。 / ポウリイ、やかんをかけときな。 / ポ
ウリイ、やかんをかけときな。 / みんながのむんだ、お茶アだよ。

スケイ、そいつをおはずしな。 / スケイ、そいつをおはずしな。 / スケイ、そいつを
おはずしな。 / みんながもうもう行っちゃうぞ。

【寺山修司】(p.68) ポリー やかんをのつけてよ / ポリー やかんをのつけてよ / ポリー
やかんをのつけてよ / みんなでお茶をのみましよう

スーキー やかんをおろしたよ / スーキー やかんをおろしたよ / スーキー やか
んをおろしたよ / あれ あれ? /

みんなどっかへ行っちゃった

【石川澄子】(p.293) ポリイやかんをおけ / ポリイやかんをおけ / ポリイやかんをおけ / み
んでお茶にしよう

スキイやかんをおろしなさい / スキイやかんをおろしなさい / スキイやかんをおろ
しなさい / お客はみんな帰んなさった

火をおこして トーストを作りなさい / ローストにマフィンのをせなさい / 火をお
こして トーストを作りなさい / みんなでお茶にしよう

<分析結果> 谷川は「のつけてよ」などの撥音の訳をつけることで、単調な旋律にリズム感を与えている。北原、寺山、石川は同じ歌詞を3回繰り返しているため、該当する楽譜が無くこの部分は歌うことができない⁷⁾。しかし寺山の最後の「あれあれ? みんなどっかにいっちゃた」は、曲が終わった後にセリフ的に入れた場合、楽曲全体に面白みを付加すると想像できる。このような楽曲にセリフを用いることは、音楽的な趣向として用いられることが多い。石川には3番の歌詞があるが、これは楽譜のどの部分にも当てはめることができず、旋律自体が無い訳詞といえる。

⑤ロンドンばしが おっこちる

【谷川俊太郎】(pp.16-18) 1. ロンドンばしが おっこちる / おっこちるったら / おっこち
る / ロndonはしが おっこちる / きれいなきれいな おひめさま

2. ねんどと きとで つくろうよ / つくろうよったら つくろうよ / ねんどと
きとで つくろうよ / きれいなきれいな おひめさま

3. ねんどと きでは ながれるよ / ながれるってば ながれるよ / ねんどと き

- ではながれるよ / きれいなきれいな おひめさま
4. れんがと いしで つくろうよ / つくろうよったら つくろうよ / れんがと
いしで つくろうよ / きれいなきれいな おひめさま
5. れんがと いしは くずれるよ / くずれるよってば くずれるよ / れんがと
いしは くずれるよ / きれいなきれいな おひめさま
6. はがねと てつで つくろうよ / つくろうよったら つくろうよ / はがねと
てつで つくろうよ / きれいなきれいな おひめさま
7. はがねと てつは まがります / まがりますったら まがります / はがねと
てつは まがります / きれいなきれいな おひめさま
8. きんと ぎんとで つくろうよ / つくろうよったら つくろうよ / きんと ぎ
んとで つくろうよ / きれいなきれいな おひめさま
9. きんと ぎんえは ぬすまれる / ぬすまれるってば ぬすまれる / きんと ぎ
んでは ぬすまれる / きれいなきれいな おひめさま
10. ねずの みはりを たてようか / たてようかなあ たてようか / ねずの みは
りを たてようか / きれいなきれいな おひめさま
11. もしも みはりが ねむったら / ねむったら ねむったら / もしも みはりが
ねむったら / きれいなきれいな おひめさま
12. よなかに パイプを すわせよう / すわせようってば すわせよう / よなかに
パイプを すわせよう / きれいなきれいな おひめさま

【北原白秋】(pp.140-141) 1. ロンドン橋がおちた。 / ロンドン橋がおちた。

2. なんでこんどかけるぞ。 / なんでこんどかけるぞ。
3. 銀と金とてかけてみろ。 / 銀と金とてかけてみろ。
4. 銀も金もぬすまれた。 / 銀も金もぬすまれた。
5. 鉄と鋼鉄とでかけてみろ。 / 鉄と鋼鉄とでかけてみろ。
6. 鉄でも鋼鉄でもへしまがる。 / 鉄でも鋼鉄でもへしまがる。
7. 材木と粘土とでかけてみろ。 / 材木と粘土とでかけてみろ。
8. 材木、粘土はながされる。 / 材木、粘土はながされる。
9. そんなら石でかけ、そりゃ丈夫だ。 / 千年万年大丈夫だ。

【寺山修司】(pp.129-130) 1. ロンドン橋が 落っこちた / さあどうしようどうしよう / ロン
ドン橋が 落っこちた / 美しいお嬢さん！

2. 粘土と木とを かきあつめ / ロンドン橋を つくろうよ / おんなじ橋を つく
ろうよ / 美しいお嬢さん！
3. 粘土と木では 流される / ロンドン橋が 流される / それではそれではどうし
よう！ / 美しいお嬢さん！
4. 煉瓦と石とを つみあげて / ロンドン橋を つくろうよ / おんなじ橋を つく
ろうよ / 美しいお嬢さん！
5. 煉瓦と石では くずれます / ロンドン橋が くずれます / それではそれではど
うしよう / 美しいお嬢さん！

6. 金と銀とを くみたてて / ロンドン橋を つくろうよ / おんなじ橋を つくろうよ / 美しいお嬢さん!

7. 金と銀では ぬすまれる / ロンドン橋が ぬすまれる / それではそれでは どうしよう / だれか見張りを たてようか / 夜から朝まで腕組んで / ロンドン橋を守るため / 美しいお嬢さん!

8. もしも見張りが 眠ったら / ロンドン橋が ぬすまれる / あなたもいっしょに ぬすまれる / 美しいお嬢さん! / あついコーヒー / 一杯いかが?

【石川澄子】(pp.537-541) 1. ロンドン橋が / 折れた / ぽーんと飛び越せ お嬢さま / ロンドン橋が / 折れた / 橋姫とともに

2. はてさて 新しい橋を / 架けずばなるまい / ぽーんと飛び越せ お嬢さま / はてさて 新しい橋を / 架けずばなるまい / 橋姫とともに

3. 石と小石で / 橋かけろ / ぽーんと飛び越せ お嬢さま / 石と小石で / 橋かけろ / 橋姫とともに

4. 石と小石じゃ / 流される / ぽーんと飛び越せ お嬢さま / 石と小石じゃ / 流される / 橋姫とともに

5. 鉄と鋼鉄で / 橋かけろ / ぽーんと飛び越せ お嬢さま / 鉄と鋼鉄で / 橋かけろ / 橋姫とともに

6. 鉄と鋼鉄は / そるだろう / ぽーんと飛び越せ お嬢さま / 鉄と鋼鉄は / そるだろう / 橋姫とともに

7. 金と銀で / 橋かけろ / ぽーんと飛び越せ お嬢さま / 金と銀で / 橋かけろ / 橋姫とともに

8. 金と銀では / 盗まれようぞ / ぽーんと飛び越せ お嬢さま / 金と銀では / 盗まれようぞ / 橋姫とともに

9. それならば / 見張りを置こう / ぽーんと飛び越せ お嬢さま / それならば / 見張りを置こう / 橋姫とともに

<分析結果> 谷川は「おっこちる」を4回を繰り返しており、12番すべて最後に「きれいなきれいなおひめさま」という訳詞を置き、曲全体にリズム感を持たせている。この楽曲は子どもが遊びながら歌うため、そのような身体表現を意識し躍動感をもった訳詞にしたとも推察される。北原は、あまりにも短く訳しているため、旋律に合わせて歌う訳詞であることは一切想定していなかったであろう。寺山は「さあどうしよう どうしよう」という訳詞にすることで、「ロンドン橋が落ちた」を繰り返す谷川より、そこで慌てる人々の感情を表現しようとしていると感じられる。また「美しいお嬢さん!」を繰り返し、曲全体に統一感を持たせている。また最後の「あついコーヒー一杯いかが?」は、彼特有のセリフ的な訳詞で、もし歌った場合でも曲に趣きを与え効果的と考えられる。石川の「ぽーんと飛び越せお嬢さま」は他3人とは異なり、彼女のオリジナリティを感じるが、残念ながらこの部分は字余りとなり歌うことができない。

⑥てんとうむし てんとうむし

【谷川俊太郎】(p.52) てんとうむし てんとうむし / とんでおかえり / おうちがかじだ / こどもは にげた / あとにのこるは ひとりきり / ちっちゃなアンが ひとりきり / アンはこたつに はいこんだ

【北原白秋】(p.106) てんとうむし、てんとうむし、 / はよ家へかえれ、 / おまえの家や火事だ。 / みんな子供がやけしんだ。 / むすめのアンヌがたったひとり、 / ブジジグのなべの下に / つんぐりむんぐりもぐった。

【寺山修司】(p.75) てんと虫 / てんと虫 / すぐとんでかえれ / おまえの家が火事だ / 子供がみんな焼け死んだ / あとにのこった / かわいいアンが / かくれてる

【石川澄子】(p.428) てんとう虫 てんとう虫 / 早よ家へ帰れ / お前の家が燃えている / 子供たちが焼け死ぞ

<分析結果> 谷川は他の3人が「やけしぬ」といった表現を用いているのに対して、「にげた」と訳し火事から助かっている。子どもが歌うことを想定した配慮なのであろうか。また歌詞の音節（モーラ）が完全に合致しており歌いやすい。北原は、文字が多く特に2・3・4小節目は全く歌えない。寺山は、文字が多くて歌えない（3・4小節目）、字余り（2小節目）、そして6小節目には旋律に該当する歌詞が無く、歌曲としては成立しないといえる。しかし「てんと虫」というつまった表現には弾むようなリズムが感じられ、この単語1つだけでも音楽的な面白さを感じる。石川は全体的に簡潔すぎて、特に後半の5～10小節目にあたる歌詞が無い。また2小節目に字余り、3・4小節目は文字が多すぎ、歌曲としては成り立たない。

以上、6曲のマザーグースについて、楽譜にその和訳歌詞をあてはめるという方法で、谷川俊太郎、北原白秋、寺山修司、石川澄子の翻訳の分析を試みた。その結果、谷川以外の3人の和訳歌詞で歌曲として成立しない部分の特徴は、次の4点に集約できると考えられる。それは、1) 文字が多くて歌えない、2) 音符のない部分の字余り、3) 旋律のある部分で歌詞が省略されている、4) 和訳があるが完全に音符や旋律が無い、である。

5. まとめ

外国から伝播された子どもの歌を教材として扱うための基礎研究として、本論文では谷川、北原、寺山、石川の和訳歌詞の分析、および比較検討をしてきた。その結果、谷川以外の3人の和訳歌詞は、歌曲として成立しないことを指摘することになった。しかし、歌うことができないという理由で3人の和訳が不適切であると断定することは短絡的である。3者は、英国伝承童謡を押韻詩として和訳することに腐心しており、それぞれ優れた和訳となっている。我々が日常的かつ経験的に用いている単一の歌詞ではなく、このように多様な和訳をもった楽曲があるということも、外国から伝播された子どもの歌の大きな特徴といえよう。

そして、マザーグースだけでなく、英語歌詞を和訳した場合の困難さについて鷺津氏が「英語の歌を曲にのるように訳す場合に、音節数の多い日本語では、当然、内容を半分ほどに縮めなければなりません。⁸⁾」「歌える訳詞にするにはメロディーと日本語のアクセントを符号させることや、

内容を半分ほどにカットするか二番に分けないと曲にはまりにくいこと、そして何よりも歌いやすいことが大きなポイントとなり、普通の訳詩とは違う困難さをとまいます。⁹⁾と述べている。また浅田氏は、マザーグースにおける日英語の文法上の相違を、具体的に7点指摘し、原詩を同じ旋律で歌えるようにすることは困難であり、何に重点をおいて訳するのか、その選択の必要性を論じている¹⁰⁾。このように、英国伝承童謡のマザーグースは歌曲を伴っているものであっても、歌えるようにすることのみに重点を置くのではなく、訳者の趣向により多種多様に、そして自由に和訳され、日本に伝播されてきているのである。

では最後に、本論文の主目的である教材研究の観点から考察を加えたい。現在の音楽授業で、マザーグースのような外国から伝播された子どもの歌を用いる場合、その旋律の単純さから音楽学習の多方面な目的に応用可能である点に、その利点が見出されているように思われる。そのため教師は、歌詞内容やその楽曲の背景にまで意識的になることもなく、自己の経験にもとづき臨機応変に教材として用いているのではなかろうか。

しかし、本論文の分析で見られたように、和訳歌詞には多様性があり、外国曲の和訳には困難をとまう。そこで教材として用いる教師が、その楽曲の原点にさかのぼり外国の子どもの歌を文化的、社会的、史的など多角的に理解し、教材化することが求められるであろう。そしてそのような教師の教材研究によって、外国から伝播された子どもの歌は、多様な指導方法に活用、応用することができ、さらに創造的な音楽授業への展開が可能になると考える。

なお、本論文の分析で用いた谷川俊太郎のマザーグースの和訳歌詞は、音楽的な意味から大変に興味深い。彼の翻訳の特徴などを検討することから、音楽科の教材研究に対して何らかの示唆を得られるように思われる。そこで別稿において、谷川のマザーグース和訳歌詞について検討を行いたい。

注

- 1) ここでは3曲とも英国伝承童謡(マザーグース)としているが、厳密には「きらきら星」の原典は、英国ではない。「きらきら星」の原曲は18世紀末のフランスで創られたシャンソン"Ah! Vous dirais-je, Maman"(あのね!言わせて、お母さん)である。その後、英国の詩人ジェーン・テイラー(Jane Taylor)によって替え歌として英訳され、1806年に英語詩"The Star"の題名で出版された。そして、1行目の"Twinkle, twinkle, little star"(きらめく小さなお星様)が童謡として世界的に広まり、さまざまな言語に翻訳され、現在ではマザーグースの1つに分類されている。
- 2) 平野敬一『マザー・グースの唄』中央公論新社、2010(第46版)、pp.9-10
- 3) 彼女はマザーグースに関する複数の著作の中で、この点について触れている。例えば、鷺津名津江『マザーグースと日本人』吉川弘文館、2001、「歌としてのマザーグースの伝播」pp.184-201
- 4) 石濱博之「マザーグースを取り入れた歌の活動の一事例—小学校英語活動における授業実勢から—」『マザーグース研究』第6号、マザーグース学会、2004、pp.46-51
石濱博之・稲富万麻澄「小学校外国語活動における話題に関連するマザー・グースの分類とその一つの授業実践事例」『マザーグース研究』第10号、マザーグース学会、2014、pp.1-20
谷明信「教材としてのマザーグースの英語：いくつかの古語法について」『兵庫教育大学学校教育学研究』第14巻、兵庫教育大学、2002、pp.95-100
- 5) 前掲書：鷺津、p.156
- 6) 同上書：p.205
- 7) 本論文では、谷川の訳本に掲載された楽譜を基本としているため、3回繰り返している北原、寺山、石

川の訳詞は歌えないと判断している。しかし鷺津(1997)のp.276には、彼女自身が採譜した楽譜が掲載されており、そこでは初めの歌詞が3回繰り返され、それに対応する楽譜もきちんとある。このことから、この楽曲に関しては、谷川が歌いやすい訳詞にするために楽譜を省略したとも考えられる。

8) 前掲書：鷺津、p.25

9) 同上書：p.191

10) 浅田正人「ナーサリーライムの日本語訳をめぐって」『研究紀要』第5号、福岡県立集猷館高等学校、1994、pp.1-10

参考文献

- 浅田正人「ナーサリーライムの日本語訳をめぐって」『研究紀要』第5号、福岡県立集猷館高等学校、1994、pp.1-10
- 岸田理生訳、ケイト・グリーナウエイ絵『マザーグースの絵本ⅠⅡⅢ』新書館、1976
- 北原白秋『まざあぐうす』角川書店、1976
- 木原美樹子「マザー・グースの言語：日常語と詩的言語」『中村学園紀要』第31号、中村学園、1999、pp.29-35
- 木原美樹子「マザー・グースの引用にともなう、削除、変形、追加：間テキスト性の問題をめぐって」『中村学園大学短期大学部研究紀要』第38号、中村学園大学、2006、pp.27-35
- 小泉純一「アメリカ詩の中のマザーグース」『日本福祉大学研究紀要』107、日本福祉大学、2002、pp.185-200
- 鈴木直子「谷川俊太郎のマザー・グース翻訳の比較」『マザーグース研究』第7号、マザーグース学会、pp.58-72
- 平辰彦「日本における『マザーグース』受容の系譜―竹久夢二と北原白秋を中心に―」『秋田経法科大学経済学部紀要』34、秋田経法科大学、2001、pp.1-28
- 谷明信「教材としてのマザーグースの英語：いくつかの古語法について」『兵庫教育大学学校教育学研究』第14巻、兵庫教育大学、2002、pp.95-100
- 谷川俊太郎翻訳、堀内誠一絵『マザー・グースのうた第1集 おとこのこってなんでできてる おんなのこってなんでできてる』草思社、1975
- 谷川俊太郎翻訳、堀内誠一絵『マザー・グースのうた第2集 ばらののはなをつくろうよ』草思社、1975
- 谷川俊太郎翻訳、堀内誠一絵『マザー・グースのうた第3集 だれがこまどり ころしたの』草思社、1975
- 谷川俊太郎翻訳、堀内誠一絵『マザー・グースのうた第4集 6ペンスの うたをうたおう』草思社、1976
- 谷川俊太郎訳詞、堀内誠一画、大町正人編、若松正司編曲『マザー・グースのうた 別巻 マザー・グース うたのほん』草思社、1989
- 谷川俊太郎翻訳、堀内誠一絵『マザー・グース・ベスト 全3集』草思社、2000
- 寺山修司訳、アーサー・ラッカム絵『マザー・グース』新書館、1991
- 鳥山淳子『もっと知りたいマザーグース』スクリーンプレイ、2002
- 中岡典子「英国謡マザーグースの魅力と英語のリズム：ナンセンスヴァースの解釈」『東京立正女子短期大学大学紀要』32、東京立正女子短期大学、2004、pp.69-100
- 平野敬一『マザー・グースの唄 イギリスの伝承童謡』中央公論社、1993
- 深井龍雄『英詩を味わう―韻律美の構造―』南雲堂、1994
- 藤井紀男『マザーグースの諸相』中教出版、1988
- 藤井紀男『名作マザーグース 70選』三友社出版、1989
- 藤井紀男『図説マザーグース』河出書房新社、2007
- 鷺津名津江『わらべうたとナーサリー・ライム』増補版、晩聲社、1997
- 鷺津名津江『マザーグースと日本人』吉川弘文館、2001
- 鷺津名津江『ようこそ「マザーグース」の世界へ』日本放送出版協会、2007
- W.S. バエリングールド&C. バエリングールド解説と注、石川澄子訳『完訳 マザーグース』鳥影社、2003